

JST「さくらサイエンスプログラム」経験者ら 産業界・学界での成功に向け、SSC日本同窓会

科学技術振興機構(JST)が2014年から行っている「さくらサイエンスプログラム(SSP)」では、昨年度までに既に83カ国から約4万人の若者を日本に招へいし、381機関にのぼる日本の大学、高専、高校等における国際交流が行われている。

各国からの招へい者は「さくらサイエンスクラブ(SSC)」と呼ばれる同窓会組織に参加し、継続的なネットワークを構成するとともに各国において自主的な活動やイベントを実施している。8月3日には、SSPによる招へい後に留学や就職等で再来日し日本で活躍するSSCメンバーの有志(SSC日本同窓会幹事会)が中心となりSSC日本同窓会が開催された。同窓会は「日本でのキャリアパス・奨学金獲得から産業界・学界での成功へ」をテーマにオンラインで開催された。

SSC日本同窓会幹事長であるカウシタ・バナジイー博士及びJST SSP推進本部の藤木完治本部長の挨拶ののち、アカデミアとインダストリーの二つのセッションに分かれて、招待講演及びディスカッションが行われた。

セッション1(アカデミア)の招待講演では大阪大学の工学部地球総合工学科に在席するムルシヤリン・アフメッド氏(バンガラデシ出身)が登場した。現地の大学に所属していた時にSATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)のプロジェクト



JST SSP推進本部の伊藤宗太郎副本部長(後列中央)と、SSC日本同窓会幹事会のメンバーら

クトに参加し、そのプロジェクトを通して2度来日し日本での実験環境を含む研究環境に触れたことなど日本留学への志望動機、文部科学省奨学金の大学推薦枠で奨学金制度への申請などの来日準備、コロナ禍で思うように実験器具等が使えず研究の進行が遅延したことなど、来日中の苦労などを共有した。

また、海外からの留学生としてSSPやその他の様々な方法で日本でのキャリアを継続することが可能と強調し、今後ポスドクポジションを目指す展望などが語られた。

ディスカッションでは修士課程在籍者からポスドクまでを含む日本同窓会幹事会が加わり、奨学金の試験への準備方法や、博士過程入学試験への対応、アカデミアにおけるポジションを探る上での将来設計、ポスドク向けのフェローシップから、日本でのパートタイムの仕事にいたるまで、多岐にわたり各々の視点からの活発な意見交換が行われた。特に奨学金制度への申請については各パネリストが積極的に自身の経験を共有するとともに、オンライン聴講者からの反応も大きくなり関心の大きさがうかがわれた。

セッション2(インダストリー)では、東京大学PEAKコースに所属し、日本で就職活動を行い環境コンサルタント企業への就職を予定しているスウェタ・サウンダラジャン氏(インド出身)が登場。自身の就職活動の経験を通じて、日本独特の就職活動の状況などについて共有した。特に、近年日本の就活市場において拡大が続けている新たな「就活塾」サービスタなどにも言及し、日本での就職を視野に入れるSSC日本同窓会メンバーからも多くの質問を集めた。日本の就活市場規模に圧倒されると笑顔で振り返りながら、選考課程において、自身の専攻やパーソナリティ、ソフトスキルがどのように評価されるのか、を含めて自身の経験を共有した。

就活面接における日本語能力についても意見交換があり、職種、企業等によって異なるものの、日本人学生と同じ枠で応募するのであれば、ビジネスレベルの日本語は求められ実践力が重要であると強調された。

この日の同窓会には、23カ国・地域から約140名がオンラインで参加した。参加者からは質問やコメントも多数寄せられ、「(日本でのキャリアパスに関し)日本で教授職にある方からの話なども聞きたい」「日本でのリサーチフェローシップに特化したウェブページにも参加してみたい」「日本で働くことについてもっと知りたい」など、日本におけるアカデミア、産業界での就職につながる実践的な内容に関する企画を望む声も多く寄せられた。